



第61回日本医学検査学会参加報告(後編)



会期 2012年6月9日(土)・10日(日)

会場 三重県総合文化センター／メッセウイング・みえ

3. 匠に学ぼう！ 実践グラム染色道場

(行列のできるスキルアップ講座 Part Ⅲ)

講演者 山本 剛(西神戸医療センター臨床検査技術部)

報告者：川島 麻衣子(検査2科細菌係)

細菌検査においてグラム染色で得られる情報は多彩であり、グラム陽性・陰性の区別以外に、菌の形態(球菌・桿菌等)や配列(双球状・連鎖状等)などの鑑別も可能です。また、白血球や上皮細胞等も染色されるため、採取した検体の質を評価することもできます。適切な抗菌薬を早期に選択する上でもグラム染色は非常に有用です。

今回は主な検体材料別にグラム染色を鏡検する際の留意点を解説していただきました。

【材料1：血液培養のグラム染色】

血液は無菌状態のため、常在菌や周囲汚染菌などを考慮する必要はなく、染色された菌の形態的特徴を分類し菌を推定します。そして、菌の性状(ブドウ球菌、連鎖球菌、芽胞の有無など)を具体的にかつ迅速に報告することが重要です。

【材料2：喀痰のグラム染色】

肺炎の起炎菌を正確に検出するには、良質な喀痰採取が不可欠です。検査材料の質が悪いと検出率が低下するので注意が必要です。

市中肺炎は肺炎球菌(グラム陽性双球菌)やH.influenzae(グラム陰性短桿菌)が中心です。一方、院内感染の肺炎はグラム陰性桿菌が起炎菌であることが多く、特に緑膿菌が重要です。

【材料3：尿のグラム染色】

単純性膀胱炎の起炎菌は、大腸菌を中心とした腸内細菌(グラム陰性桿菌)が主体となります。一方、複雑性膀胱炎では、グラム陰性桿菌かグラム陽性球菌かによって使用する抗菌薬の種類が異なるため、グラム染色の結果はとても重要です。

今回の講演で、グラム染色を有効活用するためのスキルを、画像による症例を通じて教えていただきました。また、鏡検する際は背景の成分にもしっかり目を向けることや材料毎に出現頻度の高い菌の特徴を把握しておくこと等も非常に大切であることが分かりました。

臨床の先生方に有用な情報をお届けできるよう、今後も技術の向上に努めてまいります。